

2021年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第十九主日(9/26)礼拝説教  
「キリストの言葉を思い出す」ルカ第23章53b節から12節

【聖書】

ルカによる福音書23:53 婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ。24:1 そして、週の初めの日、明け方早く、準備をしておいた香料を携えて墓に行った。2 すると、石が墓から転がしてあり、3 中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに立った。5 女たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられた頃、お話しになったことを思い出しなさい。7 人の子は、必ず罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活する、と言われたではないか。」8 そこで、女たちはイエスの言葉を思い出した。9 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいたほかの女たちであった。女たちはこれらのことを使徒たちに話した。11 しかし、使徒たちには、この話がまるで馬鹿げたことに思われて、女たちの言うことを信じなかった。12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

1 力ない救い主なのか

先週、教会のポストに投書がありました。差出人の名前はありませんでしたが、内容から日蓮関係の信徒さんからのものでした。冒頭にこうありました。「磔にされて他愛もなく殺されるような力のない者に、人も人類も救えるわけがないではないか」。私は、それを見て「本当にその通りだ！」と思いました。十字架で殺されたイエスに人を救う力などありません。

しかし、この投書の主は、知るべき事をまだ知らない。十字架で死んだ力ないイエスは、三日目に復活した、という事です。イエスの復活を知っていたら、この人はキリスト者になっていたでしょう。十字架の死から三日目の復活こそ、イエスがキリスト、救い主である証であり、私達の信仰の肝心かなめ。私達を救うのは、イエス・キリストを十字架の死から甦らせた力である、とはっきりと告げた投書に思えました。

しかし、この投書の主のように、またかつての私自身のように、一人の人間が、十字架に架かって死んだイエスが三日目に甦った事を受け入れ信じるようになる、それはまさに不可能なこと、奇跡だと思います。その奇跡はどのように起こるのでしょうか。

## 2 神の創造の力

さて、イエス・キリストの復活について、確実に言える事があります。復活は、「蘇生」ではない、という事です。ナザレ人イエスは、十字架の死から息を吹き返し、この後、何十年か地上で生き布教し、キリスト教の教祖となったわけではありません。イエス・キリストは、全く新しい命、永遠の命へと甦ったのです。そこには、この世界の外からの力、天地万物とそこに生きる全ての命を造り出した力、無から有を生み出し全く新しい命を造り出す、御神の力が働いています。それは、今日のテキストで言えば、6節に記されています。新共同訳では、二人の人は「**あの方は復活なされたのだ**」と語ったと訳されています。が、原語では、「あの方は復活させられた」と受身形。聖書で主語のない受身形の場合、主語は天の御神。イエス・キリストの復活の主体は、天地万物を造られたみ神です。

つまり、イエスの復活は、神によって新たに造られた「外からの命」が地上へと突入してきた出来事でした。何千万年も前、小惑星が地球に衝突した時、あまりに大きい衝撃により、直径何百キロという穴があき、舞い上がった粉塵が空を覆い太陽を隠し、地球は氷河期に突入した、その結果、恐竜等多くの生物が絶滅したそうです。ですが、主イエスの復活は、この小惑星衝突以上の衝撃を地上にもたらしました。生きとし生ける者を縛り付け離さなかった「死」を打ち砕く「命」が出現したのですから。すべての命のあり方を変えずにはおれない衝撃です。先ほど共に読み交わしたコリント信徒への手紙 I 第15章のパウロの高らかな賛美、「死は勝利に呑み込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」とある通りです。

ですが、小惑星の衝突とは異なり、新しい命は、2000年前のエルサレム近郊の墓の中でひっそりと現れます。今日の聖書も、静かに、主イエスの復活を語ります。3節「**中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった**」。ルカ福音書で「主イエス」という言い方をしているのは、ここだけです。一方同じルカの手により、ルカ福音書の続編とも言われている使徒言行録には、「主イエス」という言い方が19回も現れます。皆さんもご存じのように、使徒言行録は主イエスが復活して父の御許へ帰って行かれた後の弟子達の物語であり、復活前のイエスは登場しません。ですから、ルカが「主イエス」と記す時は、他でもない、十字架の死から復活されたイエスを示しているのです。ルカがここで『主イエスの遺体』と書いたのは、「復活の主イエスのからだ」のこと。まだ墓に横たわっていた筈の遺体を想いつつ、「これは我々と同じ人間となってイエスという名で呼ばれた方の亡骸。が、しかし今は、そのお方は甦られ私どものキリスト、主になってくださった。その方のおからだは、もう墓にはなかった」とルカは感慨深く語っています。死、滅びを打

ち破る天の御神の創造の力が、墓の内に横たわるイエスに働き、永遠の命へと立ち上がらされたから、「主イエスの遺体が見当たらなかった」。決定的なことが、つつまじやかに記されています。

主のイエスの甦りの命には、神の創造の力が集中的直接的に注がれた、この世のものでない神の輝きを持つ命。この命の輝きの一端は、女達の傍らに現れた二人の服の輝きに現れています。突如現れた二人は、「輝く衣」を着ていました。この「輝く」は、ルカ福音書第9章「山上の変容」と言われるエピソードで、大きく変容した主イエスの様子を描く際に使われた言葉です。「祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた」(9:29)の「輝く」と4節の「輝く」は同じ言葉で、人が侵すべからざる神の輝き、天上の聖さを言い現わすものです。

### 3 「思い出しなさい」

さて、天上の輝きをまとった二人から最初に主イエスの復活を告げられたのは、イエスの遺体に香料を塗るために日曜日の早朝、夜明け前に墓を訪れた女達でした。10節で名前が明らかにされていますが、彼女達は、ルカ福音書で既に8章に登場した人々です。8章には「彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。」とあります。女達は、自分たちの財産を出し合い、神の国を宣べ伝え、福音を告げ知らせて町や村を行き巡る主イエスと弟子たちの世話を献身的に行いました。それほど、主イエスを慕っていた彼女達ですから、後は腐るしかない遺体であっても、心を込めて葬りたい、出来る事をしてさしあげたい、という気持ちを抑えることができなかったのでしょう。

しかし、女達は、主イエスの遺体を見つけることはできませんでした。イエスの遺体は見当たらず空になった墓に戸惑っている所に、突然現れた二人。人間界の外から来た異形の二人に彼女達は恐れおののき、顔を伏せます。二人の人は告げます。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられた頃、お話しになったことを思い出しなさい。人の子は、必ず罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活する、と言われたではないか。」

この二人の言葉が女達を変えました。ルカ福音書では、女達は「弟子たちに伝えなさい」とは命じられていません。女たちは自分達の意味で、仲間が待つ家へと戻り、彼らに語りました。彼女達は、自主的に復活の使信を担う事を決意し、行動に移す者へと変えられたのです。では、二人の言葉の何が女たちを変えたのでしょうか。先ほどの言葉のうち、命令は一つだけです。「イエスがガリラヤでお話しになったことを思い出しなさい。」実際、この命令の後、「そこで、女たちはイ

エスの言葉を思い出した。そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。」とあります。明かに主イエスの言葉を思い出す事が、女達を変えました。

この「思い出す」というのは、聖書に度々出て来る大切な言葉です。苦難の中にある詩篇の詩人は神に向かって、「私を思い出してください」と祈り叫びます。また、23章で主イエスとともに十字架に磔られた二人の犯罪人の内の一人は「あなたの御国に行く時、私を思い出してください」と懇願します。「思い出す」と言っても、「こういう事もあった、あんな事もあった」と過ぎ去った日々を懐かしむものではありません。思い出すのは、過去に聴いた主イエスの言葉、まだガリラヤにいた頃、イエスの十字架と復活を預言した「人の子は、必ず罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活する」という言葉です。この「復活する」は、正確に訳せば「神の御心により、私は復活せねばならない」、神の意志を示す「～せねばならない」という言葉が使われています。「私が十字架に死に、三日目の甦りは、神の意志である」というイエスの過去の言葉を、二人は女達に思い出させたのです。この二人の言葉に、「金、土、日、あっ、今日は確かに三日目だ」と、慕っていた主イエスが十字架に架かり死ぬ、悲しみ痛みの日から指折り数える女達、そして、件の主イエスの言葉に思い当たり驚く女達の顔が浮かんできます。この彼女達の様子を、「思い当たった」者達の様子だと語った説教者がいましたが、まさにその通りだと思います。何かが女達の記憶に当たりました、ぶつかりました。何が当たったのでしょうか。

彼女達の記憶と、イエスの言葉に現れている神のみ旨が当たった、衝突したのです。そうして、イエスの言葉の意味を悟る光が放たれます。聴いた時にはさっぱり分からなかったことが、『ああ、そういう事か』と思い当たり、腑に落ちたのです。「そうだ、イエスさまは、もう既にガリラヤで十字架の上に殺され三日目に甦られる、と仰っていた。今、まさにその出来事が起こったのだ！ イエスさまは真実に生きておられる！」「知らせねば、不安と恐れの中に沈み込んでいる仲間達に知らせねば！」女たちは、大きな力に突き動かされるように、仲間の所へと走り戻ります。

そして、それは彼女達だけではありません。主イエスのみ言葉、聖書のみ言葉を思い起こす事により、私たちは、十字架と復活の主イエス・キリストと新たに出会うのです。次のようにも言えます。私たちが思い起こすイエス・キリスト、神の言葉が、私たちの過去の記憶一つ一つにぶつかり、過去が持つ意味を変えてくれる、過去に既に出会っていたキリストに気づかせてくれる。神の永遠の命の光のうちに照らし出されて、過去の出来事の意味を私達は新たに発見するのです。この経験が、私達の復活の主イエス・キリストへの信仰を造り上げ、永遠の命へと導く、と言えるのではないのでしょうか。

勿論、私達の過去は、喜び溢れ幸せであった思い出ではありません。寧ろ、穴があつたら入りたいような恥ずかしい過去も、悲しく辛い身をよじるような過去も、裏切りや妬みなど人の罪に深く傷ついた過去の方が多いかもしれない。しかし、ああ、あの時、自分は全く気づかなかつたけれども、神が既に自分をとらえていてくださった、支えていてくださった、私の身に起こった全ての事は、十字架と復活の救い主との出会いに向けて準備されていた事だった、と気づかされる。試練のただ中でも、神は確かにおられた、神が担ってくださっていた。キリスト・イエスを思い起こす事で、悲しい記憶が「神、共にいてくださった喜びの記憶」へと変わる。そして、その時、今を生きる私たちが変えられるのです、自分は、イエス・キリストの十字架と復活により、永遠の命へと生きる者だ、という確信が与えられます。

#### 4 立ち上がるペトロ

私達の上にかかることは、永遠の命に甦らされたイエス・キリストを知る為の備えられたこと。その様子が今日のテキストにもしっかりと描かれています。女達は、喜びつつ墓場から仲間達が集まる家へと戻り、11人の使徒を含む弟子たちに、空の墓に現れた天使の言葉を伝えます。しかし、11人の使徒達も、他の弟子たちも女達の話が馬鹿げたことと思って信じようとはしませんでした。ですが、ペトロだけは「立ち上がって墓へ走った」とあります。この12節の「立ち上がって」と訳されているギリシャ語は、「復活する」という意味があります。が、ここでも不思議な事に、彼はすぐには主イエスの復活を信じる事はできません。墓に走って中を覗き込み、亜麻布だけが残されているのを見て、「驚きつつ家に帰った」と12節にあります。彼は遺体がなくなっているという不思議な出来事に驚き、「一体これはどういう事なのか」と戸惑うだけで、主の言葉を思い出す事はありませんでした。そんなペトロが、主の復活を信じたのは、この後、実際に甦りの主イエスがペトロの前に現れてくださったからです。

が、しかし、女達の知らせを聞いて立ち上がり墓へと走った自分、いえ、何かの力が自分を立ち上がらせ走らせた事を、ペトロは後になつてもしっかりと覚えていた。そうでなければ、この話は省略されてもいい話です。だが、この話はペトロにとっては忘れえない経験であり、彼は自分が立ち上がらせ墓へと走らされた事を、イエスを直接に知らない教会の仲間達に繰り返し話したのでしょう。やがて教会に伝わる伝承となり、ルカが福音書に書き留めたのです。

何故、ペトロはこの経験を忘れえなかつたのか。それは、あの時、自分を立ち上がらせ、墓へと走らせたのは、神の御力であった、この時、立ち上がらせ墓に走らせた力が、また、甦りの主イエスの出会いでも働いてくださった、とペトロが気

づかされていたからでしょう。

## 5 使徒パウロ

このように私達は、神が備えてくださるそれぞれに必要な段階を経て、甦りの命に生きる者へと変えられ続けていくのだと思います。先週、私は、イエス・キリストの復活は、信仰と宣教を生み出し世界を変えていく起爆剤のような働きをした、とパウロの言葉から申し上げましたが、まさにその使徒パウロも、甦りの主イエス・キリストによって神の言葉と正面衝突した人、変えられ続けた人でした。彼の前半生は熱心なファリサイ派であり、出来たばかりの教会を積極的に迫害した者でした。ところが、不思議な仕方で、十字架で既に死んだはずのイエスが自分を呼ぶ声を聞きます。その時から、彼は全く新しく変えられます。迫害していたイエスを信じる者、宣べ伝える者となったのです。そんなパウロの宣教は、数多の試練の連続でした。ローマ帝国からの迫害により何度も投獄され、猛獣と闘わされた事もありました。陸路の旅では盗賊に襲われ、船旅では船が遭難し海上を何日も漂った、と彼の手紙にあります。更には、同胞ユダヤ人からも付け狙われます。教会の仲間ですえ、彼のもとを離れ去る者が多くいました。パウロは、どうしてこのような試練を耐え抜くことができたのでしょうか。それは、彼が徹底して祈りつつ、復活のイエス・キリストと出会い、復活の力に生かされ続けたからです。そうでなければ、パウロは、「私達は四方から苦しめられても行き詰らず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」(コリントⅡ4:8～9)と堂々と喜びに満ちて宣言する事はできません。貧しく見ずぼらしく教会の中で多数派でもなかったパウロとその仲間達こそ、どの弟子達よりも多くの教会を創立し、2000年経っても色あせない手紙を生み出し、キリスト信仰の基礎を築きました。パウロに働いていたのは、いつも新しい事態を造り出す甦りのキリスト・イエスの力であったからです。

そして、使徒パウロを生かした同じ甦りのキリスト・イエスの力は、私達にも働いています。この私にも働いていますし、T兄にも、N姉にも働いています。N兄、O兄、N姉、N姉、Oさん、K姉、N姉、ネットで礼拝を献げておられる一人一人にも働いている、この横浜ナザレン教会にも働いています。たった一つ必要な事は、「十字架と復活の主イエス・キリストの言葉と行いを思い起こす」事。女達を、ペトロを、パウロを、数え切れないほどの信仰者達を死の力から立ち上がらせた甦りの命の力、神のみ力は、イエス・キリストの言葉を通じて私達にも働くのです。

そして、この力は、教会に集うキリスト者だけの為ではありません。天の御神は、今、この世の罪、自分の罪に傷つき、死にかけ、絶望し、もう動けない、何もでき

ない、とうづくまる全ての人達が、イエス・キリストの甦りの命の内に立ち上がって欲しい、と願っておられるのです。だがしかし、イエスの言葉を聴いたことのない人は、思い起こす事はできません。教会は、キリストの十字架と復活の福音を知らない人々に宣べ伝え、イエスの言葉を思い出してもらう為に、先ず自分達がイエス・キリストの言葉を思い起こし、甦りの主と出会って生かされる為に、毎週、礼拝をささげます。繰り返し繰り返し、十字架と復活のイエス・キリストの話聞くのです。

新型コロナウイルスという死の不安に囲まれ、社会の中に深い分断が走り、閉塞感が充満する現状を真実に打ち破り新しい状況を造り上げるのは、人の力ではなく、キリストの甦りの力です。今こそ、私達教会は、復活の主イエス・キリストの福音を宣べ伝える時。自分を神とし、滅びるしかない命を生きていた者達を御子イエス・キリストと出会わせ、永遠の命を与え、イエス・キリストを宣べ伝える者として用いてくださる。天の御神を賛美せずにはおれません。祈ります。